

溪流隊

計画作成の経緯

A 基本方針と課題

- ①精神 自然とかかわり、自然と遊ぶ
- ②形態 沢を目標としたベースキャンプ方式
- ③課題 沢での安全性の確保

B 夏合宿の概要が決まるまでの飯田と私

飯田は島。私は深い沢。それが代をとった当時から、二人の夏合宿への導入目標であった。両者に共通するのが沢。そして沢の安全性をいかに確保するかが我々の大きな課題であった。その為にはまず、我々自身が沢に習熟しなければならない。また行動の中から、合宿へのイメージも深められて来ると思われた。そこで我々は四月から夏に向けて沢のワンダリングをこなしていった。その際、岩崎元郎著『沢のぼりの本』(白水社)一〇六頁の「自分のことは自分でやる」を大いに参考にした。

以下、我々の登った沢を月ごとに記してゆく。(番号は通しを意味する。)

四月

- ①葛葉沢本谷(丹沢)
- ②勘七の沢(丹沢／登山訓練所講習会に参加して)

五月

- ③釜ノ沢(笛吹川本谷)
- ④ヌク沢左俣(同右)

六月

- ⑤同角沢(丹沢玄倉川)

C 夏合宿計画概要決まる

地域は東北。形態は、五隊に分かれての分散集中形式。飯田と私は、二人で沢を中心とした隊を組むことに決まる。

二人がチームを組むことは、四月当初、二人で沢をのぼり始めたところからある程度予想はしていた。飯田は、この決定で、西表島の計画をあきらめた。そもそも、飯田が島を指向したのには、椎名誠の『わしらは怪しい探検隊』(角川文庫)が根源的なイメージとしてあったようだ。島という形態はあきらめたが、その本質にある自由奔放な合宿へのイメージをこの合宿で実現しようとしたと

いってよいだろう。

一方私の合宿観は、山を線としてでなく、面としてとらえることにあった。その為の沢登りであり、その為のベースキャンプ方式である。当初はこの方式に最もふさわしい場所という点から地域の情報収集をしていた。しかし、結論として、この方式に特にふさわしい山域はないという考えをもつようになった。深い山域は、いたる所にある。大事なものは、その地域に合わせた創意と工夫である。その意味で夏合宿を分散集中形式にすることに異存はなかった。

D 計画のポイント

1 山域を絞る

東北で最も深く、最も沢の豊富な山域としてターゲットを飯豊と朝日に絞った。

2 飯豊と朝日を何でつなぐか

『二十万図』を広げ、コースを考える。

飯豊と朝日のつなぎ方について、?自転車?林道歩き?バス の三案があがった。?は最も魅力的であったが、自転車の調達とデポの問題を解決できずに却下。?は、日程の制約(全体で二週間)と、当時、委員会内に、林道歩きはムダであるとする空気があったことから、却下。最終的に?案を取り、飯豊と朝日を楽しむことに専念することにする。

3 沢の選択

a 二泊以上の沢はどこに？

『登山体系』からは、適当な沢を見つけることができなかった。原点に帰り、再び二十万図を広げる。そして小国から、朝日連峰につきあがる「金目川」に注目した。五万図や二・五万図で見ても傾斜が緩く可能性がありそうである。上流が難かしそうだが、この川に的を絞りさらに詳しく調べることにした。

部室の『山溪』『岳人』に金目川の情報はない。『登山体系』の朝日の沢を「雪苞沓山の会」が担当しており、『岳人』の編集室に同会の連絡先と金目川の情報に詳しい人物を尋ねる(7/6)。雪苞沓(ずんべ)は既に解散していたが、元会長の牧恒夫氏と、新潟峡彩会の本望英紀氏を紹介してもらった。金目川については、「岳人」に情報はなかった。

b 青木稔OBから学ぶ

他隊のリーダーを交え、青木OBをお呼びして「一休」で飲む(7/7)。沢の話のを伺うのが趣旨であった。話の詳細は後に記すが、「それ以上いけなくなったら、ひきかえせばよい」という心構えに気付かされたのは大きな収穫であった。

c 手紙と電話による情報収集

ア 朝日連峰

牧氏からの手紙でも、金目川の資料はなかった。『登山体系』から選んで尋ねた(同上書の関係部分のコピーと、二・五万図のコピーを送り、ルートと危険箇所の詳細を問い合わせた)岩魚止沢については可。ヒノキモッコ沢については不可の解答あり。岩魚止は、降り口の位置に問題が残った。尚、詳しくは同人誌『雪苞沓』十から十六号を参照するようにということであった。

イ 飯豊連峰

飯田が本望氏に電話し、飯豊の前川が二日以上の沢として可能性ありとの情報を得る。部室の『岳人』に本望氏の詳しい遡行記録を見つける。後、茗溪堂で、釣り師の植野稔著『源流の岩魚釣り』(冬樹社)より魚止ノ滝までの記録を入手する。尚、予餞会の折に山田達夫OBから印象に残る沢として伺っていた石転沢の大雪溪も、コースに組み込むことにした。

d 前川調査と湯ノ島小屋負荷

青木と私とで、負荷を兼ねて調査に出る。なにしろ「強靱な身体と精神力を持つ一部の人達にのみ許される前川遡行」(前記・本望氏の記録より)である。あたっただけろであった。

沢で三泊。試行錯誤と緊張の連続であった。しかし、実に充実しており、実に鮮やかで、実に奔放であった。倒木上でのビバーク、大滝の豪音を聞きながらの雪溪右岸のビバーク。この遡行をやり終えて、我々は、七分通りの合宿達成の手ごたえをつかんだ。

課題は、ヤブこぎ時の滑落防止と異常に多い水量、虹吹滝上部のトラバースルートである。個人的には、ウルシ対策も必要だ。調査後、現地で、本望さんに電話連絡をして、多くのアドバイスをいただいた。

- ① ヤブこぎ時、特に小沢のトラバースの注意……ひざをつきフリクションを効かす。指を土にめりこますことも有効。道具として、ピックを使うことも考えられる。
- ② 水量は、調査時、梅雨時で多かったのではないか。
- ③ 虹吹滝左岸の高まきはなるべく下部をゆくこと。尚、現場での判断を最優先するべし。
- ④ 雪溪の残り具合は不明。雪溪上のビバークは常識としてしない。
- ⑤ その他として、八月の飯豊の天気は安定的。ポケットの多いカッター。なた等は便利。詳しいことは、追って手紙で知らせてくれるとの暖かい御協力の言葉をうけとることができた。

E 計画を煮つめる

- ①朝日の沢 岩魚止沢の外に、イリソウカ沢を加える。(『登山体系』より)金玉水をベースにピストンで日帰りワンデリングを企む。イリソウカ沢の可否は現地判断とする。
- ②釣りと花「自然と遊ぶ」のテーマに沿って、新人堀内を釣り係に、服部を高山植物係に任命。全員に釣りざおを持たせる。釣りのできる場所は、前川・飯豊温泉付近・大鳥池である。
- ③ヤブ対策 手首サポータ・軍手・金ペグ利用のピック
- ④交通 山都タクシーに川入までの手配。小国からも五味沢方面へのタクシーの手配。
- ⑤小国の幕場 木ノ内コーチが小国出身の斉藤亜基夫OBを介して光岳寺の庭先の借用を手配して下さる。
- ⑥トランシーバー 切合小屋で使用している遭難対策用のトランシーバーと波長を合わせるべく山都の役場で波長数と定期交信の時間を問い合わせる。波長数は A3 26.768KHZ とわかるが、詳しくは福島県遭難対策無線局の千葉豊弘氏に問い合わせたらよいことを教えてもらう。さっそく千葉氏に連絡をとり、8チャンネルのトランシーバーを使い隊員を連絡用に切合小屋に残すべきことなどのアドバイスをいただく。計画書のコピーを送って万一の場合に備えて受信の協力をお願いする。しかし、体育局のトランシーバーは2チャンネル。新しく購入も考えたが、2台持ってゆき、切合小屋の人に協力をお願いしてみることにする。
- ⑦その他 本望氏の手紙からヒントを得、二十米程の補助ザイルを機動用として用意する。また、石転沢用に簡易アイゼンを全員が購入する。

F 溪流隊誕生

以上のような過程を経て、以下に記す六項目を柱とした計画案が完成した。

- ①前川のベースキャンプ式遡行
- ②陵線のお花畑
- ③石転沢の大雪溪
- ④飯豊温泉付近の岩魚釣り(以上飯豊)
- ⑤岩魚止沢・イリソウカ沢のベースキャンプ式日帰りピストン
- ⑥大鳥池の釣り(以上朝日)

沢の遡行に関しては、以下の二項目に留意した。

- ①身長以上の滝は、原則としてザイルを使用する。
- ②隊員を疲労させない。

(その対策として沢での逆団配。上級生の食当。隊員の順番を 3年・2年・新人・L・新人・3年・2年・SL の順とする。尚、前川は、切合に荷物を預ける予定である。よって、従来の、縦走用の荷物は軽減される。) 現場での課題として、

- ①切合小屋に対するトランシーバー交信の協力の依頼
- ②前川の水量 が残った。

(以下は 1984 年夏合宿の記録です。)

行動記録

1 日目 8 月 8 日 (水) 上野・・・山都・・・川入

「バカヤロウ」

上野駅。これから合宿が始まる。緊張する私。

しかし隊員はいたってのん気だ。締まりがない。これで大丈夫なのか。

体調チェックで服部が「ちょっと睡眠不足です」と訴えた時、私の不満は爆発した。「バカヤロウ」。ヒステリック？。否。意図的、直感的、バランス感覚である。

「夜の訪問者」

山都駅でステビ。寝入り鼻、一人の人物が我々を訪れた。田中新生。山都タクシーから依頼を受けた白タクの運転手である。明朝は都合が悪いので、今晚中に運ぶことにしたという。

途中パンクして、十二時半、川入着。車中、新生氏はよくしゃべる。その会津弁がまともにわかるのは茨城育ちの青木と私だけ。青木は恋人の獲得法を伝授されて照れていた。新生氏、帰りぎわにいきなりビールをもちだし、飲みましょうという。丸食で別れの乾杯をして、床につく。

2日目 8月9日(木) 川入～切合小屋

「奇襲作戦」

七時半。幕場の管理人の到着とスレ違いに出発。初日とあって荷物は重い。その上、太陽がカンカン照りつける。陵線まで四本もかかった。ここからは、日よけの木々はない。暑さとの闘いとなったが水の残りも少ない。調査によると切合まで水場はない。

ふと谷間から沢音が響いてきた。雪溪が見える。二百米程下だ。そこで飯田と私は、小沢に下り水を汲む奇襲作戦を決意。水は豊富にあった。四リットル程汲んで帰り、皆の喉を潤す。しかし結果的に作戦は失敗だった。歩き始めて間もなく三国小屋の手前に正式の水場があったのだ。我々はここでしこたま水を飲み西が「天上の楽園」と称した美しいお花畑の中を一気に切合小屋に向かった。

「会津のイワナは擦れてねえ」

三時五十分。切合小屋着。小屋の皆さん(佐藤さん・長谷川さん・二平さん)は、負荷とトランシーバーの交信をこころよくひきうけて下さった。しかも夕食後、我々を小屋に呼んで酒をごちそうして下さい。その席で自己紹介。長谷川さんはしきりに恋人の名前を聞きたがる。理子ちゃんとユミちゃんはすっかり覚えられてしまった。以下、長谷川氏の弁。「会津の女は擦れてねえからいいです。会津のイワナも擦れてねえですからよく釣れますよ。イワナをみやげに元気で帰ってきてください。

果たしてイワナは釣れるだろうか。

3日目 8月10日(金)

「フィルムの歎き」

小屋に荷物を預け、六時半発。トランシーバーの交信をとりながら美しいお花畑を歩く。快調なペースに「今回まだエピソードがないですね」と藤川。「その内あるだろ。ところで、お花畑を歩くところ、写真に撮ってくれや」と私。「じゃフィルムかえますから待って下さい」私は隊を止めた。だが替えのフィルムが見つからない。「絶対あります」……「あるはずなんです」ザックの中身をすっかり取り出し「やっぱり忘れました。」なんたることだ。しかし、今日の行程は長い。フィルムはあきらめることにする。

「基本的人権の尊重」

牛首からは長い下りだ。ここでトランシーバーの交信ができなくなる。この下りで我々を困らせたのが青木のへ。飯田の執拗な攻撃に青木が切り返す。「それは個人の自由ですよ。」名解答に一同大爆笑。オンベ松尾根の水場手前で東洋大ワングルと会う。その中に鈴木OBの息子さんがいてビックリ。また、フィルムは、途中、喜多方市役所の方に二十四枚撮りを一本分けてもらう。湯ノ島小屋には四時十五分着。負荷は無事残っていた。年間二万米登山を続けている人が同宿。山菜を分けてもらう。

4日目 8月11日(土)

「西不調」

日の出とともに行動開始。右岸の河岸台地上を快調にすすみ、河原に降りて一本。ここで西が

不調を訴える。藤川をつけて下らせる。この間、エキスパート風の三人連れが我々を追いこしてゆく。釣り師も二・三人入っている。

「ゴルジュ突破」

水量はかなり減っていた。ゴーロをとばす。一本で入り鳥の子沢出合。この先はゴルジュが続く。徒渉をくり返しながら突破していく。補助ザイルでトップを確保してロープを渡す。それにカラビナをかけて後続が渡る。たいがいは、これでうまくいくが、一箇所幅五米程の淵が現れ一思案。浮き橋にザイルをつけてトップを泳がす。光荣あるこのトップは青木。続いてザック。アタックも、キスリングに劣らずプカプカ浮く。三十一代のアルバムで見た念願の沢泳ぎができて、うれしかった。

「岩魚よさらば」

下追手前、瀬にはばまれる。青木が暗い淀みの中に岩魚の魚影を発見。三十センチはあるという。しかし、時間がない。喉まで出かかった「釣るぞ」の声をおさえて、左岸を高巻く。

「たき火」

夕暮れが迫る。徒渉するたび震えがくる。そんな中、飯田はメットを忘れて二度も冷水に入ってしまった。やがて、びしょぬれの流木渡りを終え右岸のゴーロをゆくと下追流沢出合い。煙が見える。先行していた三人連れのパーティーだ。彼らに草をはらって砂地を増やす術を教わり、幕営。たき火を作り一日の疲れをいやす。

5日目 8月12日(日)

「現地情報を生かせ」

七時発。出発前、先の三人連れのリーダーから情報を仕入れる。前に通った時は、崩れてとぎれとぎれの雪渓をダブルアックスで登り、めんどうだから後続はフィフティであげたという。これはへたに沢をつめるとやっかいになると思った。

「魚止めの滝」

下追沢出合からはゴルジュがきつい。右岸にとりつき段丘上の藪をハイピッチで進む。ここから隊の順番を沢シフトに変えた。しだいに傾斜がきつくなる。立木をまたぎの連続。今のところ新人に危なげはない。九時。魚止の滝が木々のすきまから見える。ゴルジュにはばまれ下降は無理。高巻きで、岩に阻まれかなり上に上がる。途中調査時の露営の跡を見つける。十一時。魚止の先で沢に降り昼めし。ここから、牛ヶ首沢をさける為左岸にとりつく。

「虹吹の滝」

左岸の藪を二時間もこぐと、湿地となる。調査では、この先に虹吹があるはずだ。青木と山村を偵察に出す。登るのは無理とみて、枝沢を伝い高巻く。百米程上り横にトラバース。ところどころ岩が露出しており斜面もきつい。慎重にすすむ。牛ヶ首御鏡沢中間付近で四時。一本とって、山村に天気図をまかせ私と青木で先を偵察する。

「ガオ」

突然、青木が「ガオガオ」とほえる。こいつどうかしたのかとたずねると、熊の足跡らしきものを発見したという。音をたてて人の気配を知らせたつもりらしい。

雪渓の近くまで下降して、調査で懸垂下降に使った捨て縄の跡を見つける。雪渓と山肌の間が解けておりここからの下降は無理。下降したとしても、先で雪渓が切れている様子。とりあえず、今

日は、ここでビバークに決める。四年が食当。小沢の水を使う。青木と山村がなかなか立派な寝床を作ってくれる。ティーパーティはなぞなぞ。思えば、今合宿で初めてのティーパーティである。

6日目 8月13日(月)

「地上に降りる」

六時半発。藪のトラバースはさらに続く。小尾根を一つ越え下を見る。昨日の偵察で考えた大り、雪渓は切れていた。

九時、御鏡沢手前の雪渓上に懸垂下降。掘内が「やっと地上に降りるんですね」という。左岸の藪にとりついたのが昨日の昼。まさにピッタリの表現だ。

「交信入る」

わらじをつけて、小尾根二つ分程歩くとまた雪渓が切れる。右岸にとりつくが、意外と大きな高巻きをしいられる。十一時。百米程上がって一本。トランシーバーのスイッチを入れ、応答を呼びかける。すると「はい、こちら切合せ」との声。我々は驚いた。声の主は藤川で、西も回復し、今日切合に上がり交信を待っていたという。うれしい知らせだ。一同元気づく。

「安堵」

高巻きは、そのまま吹上滝を越しその先で沢に降りる。中央の崩れた雪渓が続く。水量も少なく沢伝いに歩く。

一時四十五分。前方に滝が見える。上追流沢出合だ。これで関門は通過したわけだ。ジワリとした安堵感がわく。昼めしがうまい。

「霧の切合」

我々を手こずらせた前川本流と別れ、上追流沢へ。出合の十米滝を越えると以後滝はない。ゴーロの連続。明るい日射しをあびて、快適にのぼる。

四時半。コールが聞こえる。藤川達だ。まっすぐ沢ぞいにつきあげるべきだったが、左の笹やぶをコールの方に入ることにする。これがいけなかった。声の方へ行けども行けども陵線に出ない。三十分はかかったろうか。やっと藤川達を発見。西も元気だ。すでに、夕暮れが迫り、霧がたれこめていた。霧の切合での再会である。

「ドラム缶風呂」

五時半。切合小屋着。長谷川さんたちに無事を伝える。

小屋を増築するらしく、突如、柱の骨組ができていた。風が強く、大工さんに頼んでその中で夕食。くじら汁をわけてもらう。その上、大工さん用のドラム缶の風呂に入らないかという。

われわれは喜んで親切にあずかった。寒風ふく中、山のとっぺんで入るドラム缶風呂の味は格別であった。前川突破の疲れがジンワリといえていくのである。

7日目 8月14日(火)

「朝のお茶」

昨夜の風は止み薄もやがかかる。静かな朝だ。今日は予定を変更して御西小屋で泊まることにする。明日は一気に飯豊温泉まで下るつもりだ。石転沢の落石事故の知らせと、皆の疲れを考えてそう決めた。

小屋の皆さんに全員でお世話になったあいさつに行く。そこで朝のお茶をごちそうになる。朝のお茶は会津の風習らしい。数日後、訪れるであろう女子隊宛に書き置きを託し小屋を立つ。

「いつか来た道」

御西までは二日目に通った道だ。あいかわらずお花畑が美しい。眼下には我々ののぼった沢筋が見え隠れする。前に見た印象とはどこか違う。自然との関わりが生じたのだ。

服部の元気がないのが気にかかる。歌も出ない。掘内は相変わらず元気で山村とひょうきんに写真のポーズをきめこんでいる。

二本半で御西小屋に着く。

8日目 8月15日(水)

「朝やけ」

四時起床。薄暗いなか外に出る。やがて朝焼けが始まり大日岳が山肌の色を次々と変えていく。横では食当のラジウスがゴーとうなる。朝の風がパタパタとヤッケをなびかせ身がきりりとしまる。

五時半発。二本目、小池の先に小雪溪あり。野生の感が水の匂いをかぎつける。案の定十米も下った所に水場あり。各自補給していく。

北俣岳まで三本半。早いペースだ。途中石転沢を見る。白く長く急な雪溪である。

三時。飯豊温泉手前の林道。三年に幕場を探させ、ついでにビールを買ってきてもらう。

9日目 8月16日(木)

「敗戦」

二隊に別れ岩魚釣り合戦。

ところが、結局、両隊とも収穫はゼロ。

皆疲れていたのだ。栗原隊は昼寝隊に、飯田隊は行水隊に変身してしまった。

「夕涼み」

夕食後、今日も一風呂浴びる。温泉玄関前のホールで夕涼み。就寝はフリー。缶ビールが入ると、飯田と西を中心にホロ酔い気分のよもやま話が始まる。ほんに楽しきかな。

10日目 8月17日(金)

「マリー・クリスチーナ」

文明の力、バスは速い。くねくねと続く山道を見るみる進む。畑の平坦地を過ぎ人荷が増え始めるとやがて小国の町に入る。さっそく幕場となる光岳寺を探す。

光岳寺は大きなお寺だ。住職は留守だったが、以後だれからともなく我々がマリークリスチーナと呼ぶことになる美しい奥さんが快く境内を使わせてくれる。大銀杏の下に天幕を張っていると、オートバイにまたがった若い住職さんが帰ってくる。改めて挨拶に伺う。草野球のチームも作っているらしく活発な住職さんだ。

その後、小国生まれの斉藤壱其夫OB宅を訪問する。

「一斗缶バーベキュー」

夕食は焼肉。鉄板は湯ノ島小屋から山村に持たせておいた一斗缶。図のように一斗缶を横にして中からホエブスで加熱する。ブリキのへこみがいい具合に油をためる。その上にキャベツをのせ、

肉をかぶせる。西と山村の買ってきたビールが着くと飲みよ歌えよの山賊パーティーとなる。

11日目 8月18日(土)

「洗濯」

昼、洗濯が流行った。どうもマリークリスチーナがめあてらしい。石鹸がどうの洗濯機がどうのとマリーのもとにあしげく通う男たち。マリーはいやな顔ひとつせずめんどろを見てくれた。

「ギョウザ大会」

この日、渡辺隊と女子隊が合流する。渡辺隊はそのまま飯豊へ向かった。石転沢の情報を与え、四本爪のアイゼンを貸す。女子は一泊することになる。

夕方、ギョウザ大会が始まった。あらかじめ作っておいた二百個はあろうかというギョウザを次々とゆでていく。本場、中国じこみの水ギョウザが山のようにできあがる。食べはじめて五個まではうまかった。十個まではギョウザの味がした。それから先はほとんど無理やりだった。それでもコッフェル二杯分余ってしまい、女子パーティーに分けたのだった。

夜はスイカを食いながら自前の花火大会。床につくのはずいぶんと遅くなってしまった。

(記 栗原勝義)

第二ラウンド

1 つらく長い登り

12日目 8月19日(日)

二日間お世話になった光岳寺に別れを告げ、タクシーにてカクナラ登山口へ。いよいよ2ラウンド目のゴングが鳴った。

いきなり薄暗い急登に取りつく。初日の重荷、異常な程の暑さも手伝って気分は滅入り気味。これも尾根に出るまでの辛抱と思い頑張る。が、尾根に出たら出たで猛烈な直射日光に悩まされる。おまけにめざす大朝日ははるかかなたにある。一本取ると、みんな僅かな草陰に身をすりよせて休んでいる。配ったポリタンの水がまたたく間に空になった。

時 分、大朝日着。四方から深く刻みこまれた沢がせりあがっている様は壮観。明日ゆく岩魚止、あさってゆく入りソウカ沢も見える。改めて東北の山の深さを実感する。五分程下れば、金玉水に着く。猛烈な暑さの中の辛く長い道のりであった。今日はゆっくり休んで明日の沢にそなえよう。

2 青空を仰ぎみてゆく岩魚止

我々が普段丹沢で行っている沢登りのイメージは、陽の当たらないジメジメした沢をクモの巣と格闘しながら行く、さしずめ陰の沢登りである。だが、この岩魚止沢の遡行は、振り上げば青空がひろがっているという、まさしく陽の沢登りであった。それでは、その日の沢登りを紹介しよう。

13日目 8月20日(月)

昨日きた道を引き返し大朝日へ登る。大朝日の南東より突き上げてくるのが朝日俣沢。その支流、大朝日のやや東に突き上げるのが岩魚止沢である。平岩山付近より登山道を離れ、出合に向けて小沢を下降する。出合付近は残雪におおわれ、沢は残雪の下にパックリ口をあけた様に突っこんでいる。慎重に残雪の上に渡り、岩魚止沢出合に出る。いきなり現れる三十メートルの滝は、やや斜滝になっており、ホールドも多く拍子抜けするほど簡単に登る。

次の十五メートル程の滝はザイルを使い通過。この滝を過ぎると水量は一気に減り、後は平凡な滝が連続する。草原上の両側にはお花畑があり、上を見上げると紺碧の空がひろがっている。「夏は沢に限りますね。」昨日はフラフラしていた新人が好き勝手なことを言っている。三時間程で突き上げ陵線上を大朝日へ。光る日本海を見ながら式典を取り行う。快適すぎて沢登りとしては、いささかもなりなかつた。でも明日は一筋縄ではいかない沢が待っている。

3 入りソウカ

詰め入る先に 待つ我が家

沢登りの欠点を挙げると、それは最後の詰めであろう。とんでもないガレ場が待ちかまえていたり、時にはヤブこぎをしいられたりする。詰めの部分に行くほど登りがゆるやかになり、そこには、お花畑があって、ハードだったその日の沢登りの余韻を楽しみながら陵線に出る。できれば、突き上げた陵線上にはもう幕場が用意してある。この夢のようなお話を実現してくれたのが、この入りソウカ沢である。

14日目 8月21日(火)

三・四・五で出発。中岳より柴倉沢出合めざしてヤブに突入。尾根上をまっすぐ行けばよいということはわかっているものの何も見えないヤブの中のこと、度々立ち止まってはルートを確認しながら進む。途中から小沢を下降し、柴倉沢に出る。柴倉沢を少し下降すると出合着。遡行を開始するまでに四本もかかってしまった。

十時、遡行開始。しばらくは平凡な河原歩きであったが、一転して滝が連続する、残されたハーケンを用しながら進む、途中滑り台のような滝に出会う。いかにも滑り落ちそうな滝に果敢(?)にも挑戦した四名のうちSL(つまり私)が見事滑り落ちる。途中約一名を道連れにして滝ツボへ。高巻いた野郎が上でニヤニヤしている。どうも滑り落ちる決定的瞬間をフォーカスされたいらしい。

この頃より大滝が現われ、高巻きを余儀なくされる。と言っても飯豊の比ではなく、みんな余裕が感じられる。長い雪渓をすぎるとゴールは間近、傾斜がゆるやかになり、花咲く草原上の小川をゆく。最後の雪渓を登り詰めると、あの黄色のみすぼらしいツェルトが我々を出迎えてくれた。女子隊と木ノ内コーチは既に到着している。

今まで木ノ内コーチのモノマネを連発してバカ受けしていた西は、本人の前に出ると急におとなしくなった。木ノ内コーチが下界から持ち込んだ最新情報により、ロス五輪での瀬古の敗北、山下涙の優勝について知る。

4 台風近づく

15日目 8月22日(水)

バタバタとテントをゆるがす音で眼が覚める。いよいよ台風が接近してきた。日本海を北上という、我々にはあまりありがたいコースを取っている。とにかくどこかの小屋で退避ということで出発。出発したとたんに風が収まり、一転しておだやかな登山日和となる。海側には飛島・佐渡ヶ島が見え、山側には月山・蔵王連峰が見えるという申し分ない眺望であるが、これも嵐の前のしずけさ、先を急ぐ。

狐穴小屋にて、ここで退避する女子を追い抜き、以東小屋へ。快適な小屋とは言い難いが、ここで台風をやり過ごそう。着いてしばらくすると本格的に風雨が強まる。夜中に通過してくれればいいのだが……

5 タキタローはいずこ

16日目 8月23日(木)

朝、依然風雨強く停滞。午後には弱まり下の大鳥池に移動、大鳥池と言えば、幻の魚タキタローや岩魚の宝庫とのこと。飯豊で釣れなかった分をここで取り戻そうと頑張るが、またもや無残に敗退。結局木ノ内コーチの釣り上げた一匹をみんなでわかちあいながら食べる。

6 エンディング

17日目 8月24日(金)

いよいよ最後の日である。夏合宿の最後は例のごとく林道歩き。「これで俺のワングル生活も最後なんだな」と考えると、それなりに感慨深いものがある。一人一曲ずつ歌いながらゆく。やや感傷的な気分になっていた私は「精霊流し」というクラウイ歌を歌い、場をシラけさせてしまった。そうこうしているうちに大鳥部落へ。リーダーの「解散！」の声と共に飲むわ食うわの修羅場に転じる。

二十日間に渡った東北旅行。熱にもめげず頑張った堀内。ボケの服部とツッコミの西の万オコンビ。ありあまる体力の山村。フィルムを忘れた前代未聞のカメラ係、藤川。正しい日本語をもっと勉強してほしい青木。そしてリーダーの栗原とサブリーダーの私、みんなまとめてごくろうさんでした。

[溪流隊 場外乱闘編]

二十四日、バスで鶴岡市に突入した我々は、さっそく佐藤淳OB(三十二期)宅を訪問した。ここで我々は、何だかよくわからないままに、集結コンパの前夜祭とでもいえそうな、飲みや歌えやの大宴会に突入してしまったのである。特におじいさん自らの手による接待のビール攻撃に、リーダーはあえなく陥落。一時、パーティとしての機能がまったくマヒするという状態に陥ってしまった。

結局、その日の夜に吹浦へ到着する予定であったのが一日延期。他パーティの大ビンシュクを買ってしまったのであった。

(飯田隆行)

合宿の反省

美しい沢と深い沢をたずさえた飯豊・朝日を舞台として、「自然と遊ぶ」をテーマにかかげた今合宿。単純な評価はできないし、又すべきものでもないだろうが、少なくとも私にたいしてこの合宿は

自信と達成感を与えてくれた。他の皆についても手ごたえのある合宿であったことを願う。

今合宿の最大の課題は沢での安全性の確保であった。

①BC方式をとり縦走の荷物を分散し、重量の軽減をはかったこと。

②逆団配・上級生の食当導入等、新人の負担を軽くするなど、疲労が一部に集中するのを防ぐ工夫をしたこと。

③隊の順番を、3年トップ・2年セカンド、以下新人を上級生の間にはさむようにしたこと。LとOで隊員の判断と沢の判断とを役割分担したこと。これらは、安全性に役立ったと思う。

結果的に、事故もなく無事合宿を終えることができた。しかし、反省点も多い。今後の活動に生かす意味でくどい点もあるかもしれないが以下に記していきたい。

1. 飯豊

a 徒渉

前川の初日、二人で肩を組んで渡る途中、私が足をすくわれ流されそうになりペアの掘内に手をつかまれて助かった。流される危険のある場所ではどのような時でもロープを張ることを原則としたい。

b 岩

二・五米程のなんでもない岩をのりこえようとして服部が上部につく瞬間、足をすべらした。ロープで確保しており助かったが、いついかなる時に落ちるのか予想もつかない怖さを感じた。おちて怪我する危険のある所は、簡単な所でも確保が必要である。

2. 朝日

a 岩魚止沢出合の雪渓 図のように、雪渓がブリッジ状になっており、一度に下りて壁をのぼって向かい側の雪渓上に渡らねばならなくなった。この壁が難しい。そこで私が挑戦してみるのだが、その時、山村が注意を無視して別のルートからのぼりだした。これを私は止めることをちゅうちょしてしまった。これが反省点の一つ。その後、対岸に渡った山村と私は、私が確保して山村にスノーブリッジを渡らせてみた。その時、私の確保の支点が何もなかった。ピックを支点に使う手もあった。このような場合、三ツ道具の使用に習熟していることは非常に有効であると思う。

b イリソウカ沢 藤川が懸垂下降でロープを無視して木の枝を使って降りようとした。確か、枝がおれたのだと思う、一・五米位上で斜面をすりながら落ちてきた。怪我はなかったが命令無視と、それを厳しく制止できなかった私は反省せねばならない。

以上が沢での問題点だ。一方、全般に、出発時間が遅かったことは、夏の暑さを考える時反省される。日の出と共に行動を開始するのを原則とすべきであった。

最後に二点だけ述べておきたい。

① 四年は、隊員がそれぞれの立場で全力を発揮できるような合宿づくりを常にめざしていなければならない。

② 夏合宿は、できるだけ長日程を組むほうがよい。私は二十日は行動日があつてよいと思う。しかもすべて自分の体力で行動すべきである。夏合宿が「旅」や「ロマン」の要素を求めるならば、日程の長さは、内容以前の問題として物理的絶対条件と思われる。